

わたぼうし新聞 第11号

発行者 わたぼうし連絡会
発行日 1988年(昭和63年)4月1日

第12号の特集 「介護とはⅡ」

かの一なるもの 永遠にして 多に分かたる

しかも一にして 永遠に 唯一つなり

一つの中に多を見出し 多を一のごとく感ぜよ

さらば 芸術の初めて終わりを会得せん

ーゲーテ詩集よりー

この新聞は障害のある人、ない人が自由にそれぞれの考え等を出し合い、主義、主張を超えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

特集《介護とはⅡ》

このコーナーはいろいろなテーマについて、さまざまな人たちに意見を述べてもらうコーナーです10号より障害者にとって大切な問題、『介護（介助）』について募集していますが、今回も引き続き考えて行きたいと思います。なお、アンケート結果も前回は引き続き掲載しております。

〈健全者の立場から〉

老人ホームにおける介護とは

老人ホーム：介護職員

一言、言葉にすると大変だと思います。言葉とは相手を理解し、自分を相手に伝える言葉のとり方です。

例えば、対応する相手である患者（老人）の要求をつかんでこそ、相手の意に沿うように答えることができる。答えることができなければ、相手の役に立たないことですから、そのためには人を構成する一人一人の性格、趣向、状態、価値観に対応できなければならないことが難しいのです。

自分の相手に対する熱意と誠意がわかってもらうためである。人の熱意と誠意で心が動かされる。それを認めてくれる態度に写ってくれと大変嬉しいことでもあります。

例えば、老人（おばあちゃん）の方ですが、何を言っても、何をしても「じいちゃん」、「じいちゃん」とくりかえして言うのです。でも、私たちが長い間対応している中で、それが何となくわかってくるのです。そんな時、一言しか言えなくても通じてくれる、わかってくれていると思った時、大変うれしくて、うれしくて、相手の意に沿うように答えることができたのでよかったと思いました。

相手が自分に話しかけて来るということは「聞いてもらいたい。考えを聞きたい。意志を知りたい。同調してもらいたい。自分との違いを知りたい等」必ず相手に対して要求をあげて接してくる。その目的に答えてこそ、接することになるのでは、ないかと思います。

ただ相手の話の一つ一つ逆らわない、相手に教えたり、指摘するのではなく、相手から気づくように仕向ける。相手の立場になっているのかということを、自分に言い聞かせるように努めたいと思っている。

障害者が街に出るとは 教職員

道路の段差がなくなり、階段の代わりにスロープが作られ、公園や公共施設に立派な身障者用のトイレが設置されても、「障害者」が街に出てゆくことができないならば、そのような物が作られた意味も価値も、ほとんど無に等しい。

「障害者」がごく自然に簡便に街に出て、買い物をし、街路を歩く、そのことを誰も特別な眼で見ない、そんな街になればと思うが、実際そうではない。たとえば、手足の不

自由な子供たちと修学旅行に行ったおりのことである。奈良や京都の駅とか神社とかの階段を車いすや松葉杖の子供たちと昇り降りすると、ごく自然に自発的に手伝ってくれた人の多くは外国人の観光客であった。大勢の日本人たちが列を作って、私たちを奇異な眼で見ながら通り過ぎてゆくのは、何やら恥ずかしいほどであった。残念ながら、私たち日本人の社会は、「障害者」に対して（あるいは「障害」に対して）成熟しているとは言えない。

スロープや街の改造も無論大切であるが、通りがかりの人が階段や段差で立ちどまっている車いすの人に少し手を貸す気になれば、ほんとうは何でもない。大人3人いれば、人を車いすに乗せたまま階段の昇り降りはできる。町中や駅で大人が3人以上通らない訳がないから、「障害者」にとって怖いのは、階段よりも通行人の気持だと言えなくもない。

「障害者」を見かけない街こそ、「障害のある街」だと少し考えれば、誰でもわかる。バスや鉄道にもっと気楽に「障害者」が乗れるように、そのための方策や介護する人の割引運賃を確立して欲しい。タクシー会社にも同じ要請をしたい。

街に出たい「障害者」はたくさんいる。私の教え子たちは、施設から映画館や美容室に出かけるために、映画料金や整髪以上の交通費を必要としている。「だから、なかなか出て行けない。」あちこちで身障者用トイレを見るたびに、私は気持ちが暗く悪くなる。ほとんどそれが使われていないか、ところによっては施錠されているからである。カギをかける知恵があるなら、「障害者」がもっと自由に自然に街に出歩くことのできるための知恵も出して欲しいと、そのカギをかけた方々に申し上げたい。

言葉をじっくり聞くことが大切！！ 障害児施設職員

言語障害、それも重い言語障害を持った人と話をする時、どうしてもその人の話をじっくり聴くことをせずして、こちらが勝手に先回りしてはなしをつくり上げてしまうことがある。その人が何を言いたいのか耳を傾けて聞けない、待てないために、その人の気持ちと離れた憶測の部分で対応してしまうことがある。

時に介護に対して、介護をする側はキチンと障害者の言うことを聴く姿勢が大事になる。けっして自分の気持ちを押し付けたり、話を先回りして聴いてはいけないと思う。また、障害者、介護される側は、介護者に遠慮したりせずに自分気持ちをしっかり聴いて欲しいということを伝えるべきだろう。

介護という言葉で結ばれる時の介護者と障害者の関係は、所詮、主従とも違うし、単なる友だち関係とも違う独自の関係の上で成り立っているように思う。お互い相手の立場をしっかりと押さえておくことが大事だと思う。

〈障害者側の立場から〉

重度障害者の介護とは 障害者支援施設・利用者

重度障害者にとって介護とは、できないことをできるようにすること。障害者自身、何ができ、何ができないかを区別し、できないことを手助けしてもらおう。そのことが大切だ。また、脳性小児マヒで緊張が強いために普段は何気なくできることでも、誰かに見られたり、あせったりすると時間がかかったり、できなくなることがある。そんなとき、暖かく手助けしてもらえたら幸いだと思っている。

言語障害が重いため、介護者言葉が通じない場合、避けて介護をしない人がいるが、聞こうとする姿勢があればいくらでも分かると思う。そのことによって、介護をしてもらう方もリラックスをして話がしやすくなると思う。介護を受けていていつもそんなことを感じます。

そうして、重度障害者が在宅、施設に入所している者にとって介護者が限られているから、外出外泊をしたくても困難に近い。とかく施設入所者の外出外泊時の介護者がいない。その問題について、みんなで考えて行かなければ、我々は外出などできない。

設備がない社会だから介護を必要としている。だから健常者はもっと障害者を理解する勉強をして、いろんな障害者と接してもらいたい。障害者問題を特定の人にだけあるのだと思わないで、自分たちの問題として考えて行動してもらいたいと思います。また、障害者自身も自分に必要な介護だけを要求して、できることはできる限り自分でやるよう心がけること。

施設生活だったころの介護 障害者支援施設・利用者

僕は七尾市の青山彩光苑に生活していましたが、昨年の12月に家庭に帰って家族と生活しています。今回は施設生活をしてきた時の経験を述べさせていただきます。

まず最初に、介護をしてもらっていて本当にありがたいと言いたいです。

自分のことになりますが、僕は施設に入っていました。そこでの入浴時・食事時・何といても忘れてはいけない訓練時・余暇時間のクラブ活動・ETCと、職員の方々は本当に大変だったと思いました。

それに、僕は暇な日曜日毎に、教会へ行っていました。わざわざ施設まで送り迎えしてくれたことはとてもありがたいことでした。

さて、介護のことですが介護される方としては、何も言う資格はないかもしれませんが、それでも中にはイヤな人、イヤな職員、イヤな施設があったり、いたりするはず。それでも障害者は耐えなければなりません。これは僕のワガママかもしれないけれど、そんな大層なものと違うかな。障害者としては、自分の好きな施設を選ぶことはできないんですヨネ。これがとても残念です。

書いていることが、何だかちぐはぐになってしまったようで大変すまなく思っています。

私の介護について 在宅障害者

色々と介助をしてもらいますと、時間的に何かをやろうと思っても、例えば風呂へ入るとき、又は外出、便所等思う時間にはできない。たえず、これらをやるときには相手のことを考えなければなりません。それだけで一人でできることを考えると不自由である。しかし今、毎日家族と一緒に時間の都合でやっていますので今ではあんまり苦しめていません。

ただ体が悪くなった場合に、病院等に行くときは、一人で行くのと相手と一緒にいく時とだいぶ時間のずれがあります。今では付き添い者と交流を行っています。

町へ飲んで歩いていきます。健常者と障害者の区別はありません。最初ははなかなか健常者の会合に出席出来なかったものです。そのうちに何回も出ていきますと、自分が障害者であることを忘れる時があります。

障害者の生活介助について 障害者支援施設・利用者

障害者の介助というと、とかくボランティアとか、愛の手とかいうように考えられがちである。たしかに障害者のことを理解してもらうことは大切である。理解されてこそ生活が可能になってくるのだと思う。でも、善意の手だけで生活していけるのだろうか。手のきかない人は、実際の手が必要なのである。歩けない人は、実際の足が必要なのである。いつもいつも必要なのである。障害者が一人の人間として生活していくためには、理解のほかには何か、もっとがっちりしたものが欲しいと思う。

介助は精神的なつながりとは別個のものとして、必要なのではないだろうか。介助と喧嘩したからといって、トイレに行かないわけにはいかないし、食事をしないわけには行かないのだ。介助する側にしても生活があるし、ボランティア（無料）では続かないと思う。介助は経済的なつながりと責任問題など、しっかりしたルールを持たなければいけないと思うのだが、どうだろうか。

もっと気軽に接して欲しい 在宅障害者

介護をする人に気を使って下さることはありがたいです。あまり気を使って、何か壊れ物を扱うような必要は本人にはいらぬ。もっと気軽に接し、友だちのつもりで接して欲しい。

健常者や障害者の間で、何かお互いにまだ遠慮がちな付き合いしか、していないように思う。

「介護・介助」アンケート結果報告 その2

昨年の8月に実施いたしました『介護・介助についてのアンケート』は障害者41名、健常者47名、合計88名の方々に回答を戴きました。ここに改めて皆様に厚くお礼申し上げます。今回は前回に引き続き「介護を行う立場」の方々から頂いた、アンケート結果の報告をします。なお、表3～6については重複回答がありますのでそのつもりでご覧下さい。

1. 年代別集計

	10.20代		30代		40代		50代以上		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	
一 般	6	10	3	2	1	0	0	4	26
施設職員	3	5	4	3	2	2	1	1	21
障害者	3	2	5	0	1	0	0	0	11
合 計	12	17	12	5	4	2	1	5	58

2. (質問12-1 あなたは障害者に介護を行ったことがありますか。)

	あ る	な い	無回答	合 計
一 般	16	7	3	26
施設職員	21	0	0	21
障害者	6	4	1	11
合 計	43	11	4	58

3. (質問12-2 どのようなときに介護を行いますか。)

	施設職員 なので	施設に慰 問	交流の場	ボランテ ィア	町で見か けたとき	その他	無回答
一 般	0	6	7	7	4	3	8
施設職員	21	1	1	0	3	0	0
障害者	0	1	2	0	0	2	6
合 計	21	8	10	7	7	5	14

4. (質問13 介護をしていて困ることはありますか。)

	言葉が通 じない	甘えが強 い	動作が鈍 い	できる事を 要求する	意志が通 じない	その他	無回答
一 般	5	1	0	1	5	3	12
施設職員	8	5	0	6	8	1	3
障害者	3	2	0	0	0	0	6
合 計	16	8	0	7	13	4	21

5. (質問14 町で障害者が困っている光景を見かけた時どうしますか。)

	言葉を掛けて手伝う	言葉を掛けるだけ	言葉を掛けにくい	知らない振りをする	対応が分からない	その他	無回答
一般	10	0	3	0	5	1	7
施設職員	14	0	1	0	1	4	1
障害者	4	1	1	2	2	0	3
合計	28	1	5	2	8	5	11

6. (質問15 あなたは介護するときに、どんな点に注意しますか。)

	用件を聞く	最後までさせる	しつこく聞かない	親しくない	相手の速さに合わせる	その他	無回答
一般	12	6	2	0	8	3	2
施設職員	16	9	1	0	8	0	0
障害者	3	2	0	0	1	0	0
合計	31	17	3	0	17	3	2

アンケート集計結果から

アンケート対象者は今回も無作為の回答ですので、若干回答に片寄りがあると思いますが、よろしくをお願いします。

介護を行ったことがあるかについては、関心のある人が多いため8割以上あります。日本全体がこのような数字になればよいのですが。

4の介護していて困ることがありますかの問については、言葉が通じないが一番。その次ぎに意志が通じないがあり、言葉に障害がなくても通じないことが色々あるこの世の中で、言葉がしゃべれないためならなおさらですが、極力相手の立場に立ち、誠意を持って接する努力を今まで以上に意識しあってお互いにする必要ありそう。

あとは「甘えがある」、「出来ることを要求する」というのも、もう一度考えてみたい重要なことと思います。

障害者が困っている光景を見たらどうするかですが、まず声をかけて、相手の状況を正しく理解することからはじめるのがよいのでは、一方的な意見や思いこみはけっしてよくはない。6の介護をする点の注意は、状況に合わせて行うのがよいと思います。

前回の障害者の立場と健常者の立場を合わせて、互いの食い違い、考え違い等、気づいた点を又話し合っていたいただければ幸いです。

次回は、それぞれ個々の方々の意見を掲載させていただきます。

団体紹介コーナー

マツナガ北陸営業所

正式には、会社名を「株式会社 松永製作所 北陸営業所」と言い、略して「マツナガ北陸営業所」という。昭和58年8月1日に門前町で開業しました。

労災、厚生年金、船員、福祉、児童、マツナガローンを適用し、車いす、円座、歩行車、純正西川ムアツ布団の販売と修理を業務内容とする。

本社は岐阜県養老町にあり、資本金は2千万円、社員数は70名（障害者約20名含む）。月産車いすは2000台、ストレッチャー150、歩行車、歩行器具は500台、円座は1000枚。

支店、営業所は12カ所、代理店は各県に5、6カ所あります。

北陸営業所は所長1名、営業1名、パート3名で事務所は所長宅内にあります。電話機5台、机、その他、車いすトイレがある。事務所及び所長宅は110坪(365平方メートル)、スロープが2カ所、ガレージ及び物品庫4戸あります。

今までの実績としては、昭和58年に片手操作のワンハンドスカールを開発し、東京のサンシャイン60で開かれた国際見本市に出品しました。同年には宮内庁病院及び皇后陛下様のご使用なさるリハビリ機器、車いすを作成いたしました。

昭和59年には『最先端の車いす作り』でNHKテレビで30分番組が放映されました。北陸、金沢医大病院へ当社の車いすが納入されています。

今後の方針としては北陸一の低価格でサービスに努め、年1回の羽ばたけ文集を「マツナガ北陸友の会」で発行し、配布する。

《お問い合わせ先》

〒927-23 鳳至郡門前町池田15-123-1

～福祉機器のアドバイザー～

マツナガ北陸営業所

☎ 0768-45-1709 1017

わたぼうし文芸コーナー

短歌 地域住民・在宅障害者

- ・吾に神は見えねど拝殿にぬかずけば 曇冷たく襟足に落つ
- ・風が舞う雪が舞うそして吾が魂も舞う 一月の厳寒の空
- ・光りつつ音なく舞える風花に 秘める性を幽かに感ず
- ・雪吊りの縄にしばらるる下枝の 葉は隠れつつ耐えて春待つ
- ・つらぬきて昨日より今日の雲凍つる 神々の眠る社の上に
- ・風の鳴る社の境内歩みゆく 人もまばらな正月七日
- ・翼持つ鳥が地上を歩みおり 松葉杖の吾は地上に歩めず

自由投稿コーナー

このコーナーは皆さんが伝えたいこと、考えていること等を自由に掲載するコーナーです。あなたのご意見をお待ちしています。

沖縄国体に参加して

～全国身体障害者スポーツ大会～ 会社員・車いす利用者

「失われたもの数えるな、残されたものを最大限に生かせ」。この言葉をもとに全国の身体障害者の代表が一堂に会し、お互いがスポーツを通じた体力の維持と機能の回復に努めてきた成果を発揮しあうものです。

我々石川県代表8人も、日ごろの成果を十二分に出し切って金メダル7個、銀メダル5個、銅メダル3個と大活躍しました。

また、この大会は常に記録を競うだけでなく身体障害者が己の障害を克服し、明るい希望と勇気を持ってたくましく生きていく能力を育てることを目標にし、一般社会に対して正しい認識を進めることなのです。

その他、沖縄県民と各県選手団が交流できるように、大会終了後、沖縄市で後夜祭が開かれ、選手、コンパニオン、役員、県民などが一つの輪になって、お互いの親睦と友情を深め、大変有意義なものでした。

昭和66年には石川県で開かれます。これまでに県内の障害者も単に参加するだけでなく、身障者自体の意識を高め、自分たちで企画や運営の面でも、どしどし参加するようにして行きたいものです。

～お便りから～

(元「石川県身体障害者更生指導所」保健師)

退職一年余りになりましたが、まだ腰痛の方は一進一退で通院治療を受けながら家庭内の仕事、半分は夫の援助で生活しています。外見は歩行も出来るし、他人からはどこが悪いのかと思われるようですが？よい日もありますが、日中の運動によって就寝中に痛みが出るので困っています。気はあせるし、体はついてこないのがイライラします。自分で理解しているはずですが？

以上の状態で皆様の期待にそえなくて申し訳なく思っています。

皆様のご活躍成功をお祈り申し上げます。

人・ヒト・ひと・人物紹介

～K. Yさん～

1. 年 令：30歳
2. 住 所：？
3. 障害名：脳性小児麻痺 2級
4. 出身地：住所と同じ
5. 職 業：会社員
6. 趣 味：オーディオ、スポーツ鑑賞
7. 現在の夢：自分で会社を作ること。
8. 外出の回数：月に5～6回
9. 外出の工夫：自分の車で外出をする。
10. 主にどこへ出かける
 - ・友だちと海へ行く。
 - ・映画館に行く。
11. 介護者を見つける方法は？
 - ・ほとんど友だちが行ってくれる。
 - ・友だちをたくさん作ること。
12. ボランティア活動についてどう思うか。
 - ・全般的に興味本位で行っていると思う。
 - ・もっと自然な形で行って欲しい。
13. 健常者に望むこと
 - ・自然な形で付き合いが欲しい。
14. 好きな食べ物
 - ・何でも、特に焼き肉。
15. 好きな言葉
 - ・希望
16. あなたの生きがいは
 - ・仕事（会計事務、ワープロ、コンピューターなど）
『会社でうまくやっていますか』という質問に対して『うまくやっている』
と思うが、上司の家族に障害者がいるので理解があり、会社が家族的です。
入社して8年目になるが30歳を過ぎてから体がきついです。
17. 障害を持って得をしたことは
 - ・特になし
18. 障害を持って損をしたことは
 - ・階段の上り下り。アテトーゼ（体の緊張）が強いので負担がかかる。
19. 「わたぼうし新聞」についてどう思いますか。
 - ・まだ、あまり読んだことがないのでピンとこない。
 - ・もっと一般人の声を載せて欲しい。

20. その他自由に語る

- ・もっか嫁さんを募集しています。
給料もまあまあです。障害の軽い人を募集しています。
本音は健康な人を募集しています。

催し物紹介コーナー

第二回ふれあい福祉まつり

- ・期 日：昭和63年5月15日（日）
- ・会 場：石川県社会福祉会館（金沢市本多町）
- ・主 催：ふれあい福祉まつり実行委員会

- (1) 国際障害者年10年の後半期に当たり、そのテーマである「全面参加と平等の実現を図り」、かつ、その中味の充実をめざす一つの取り組みとする。
- (2) みんなで大いに楽しめる文化的レクリエーションの場を作り上げる。
- (3) 実際に障害者とふれあう中から一般市民の障害者理解を進める。
- (4) 障害者が種類を越えて集まり、相互に交流する中から互いの立場を理解し合う。

- ・金沢市
- ・金沢市身体障害者団体連合会
- ・NHK金沢放送局
- ・NHK厚生文化事業団
- ・北陸中日新聞社
- ・北陸中日新聞社社会事業団
- ・石川テレビ
 - ・紙芝居・リズム体操
 - ・献腎・献眼・人形劇
- ・ミニボランティアコーナー
(手話・点字・車いす介護)
- ・参加団体PRコーナー
- ・これは便利だ！暮らしの工夫展
(手先・手足自助具)
- ・中央ステージ（福祉映画・演劇等）
- ・障害福祉シンポジウム
- ・出張福祉サービス

カルチャー・ウォッチングのボランティア募集中（雨天中止）

今回はじめての企画として、福祉会館を出発し、本多の森周辺をガイドつきで散策する『カルチャーウォッチング』を行うことになりました。

車いすの仲間たちに安心して参加してもらうためにも、多くの方々の協力が必要です。ぜひあなたもボランティアに！！

本の紹介

ダイアリー ～車いすの青春日記～

板見 陽子著 読売新聞社 定価 ¥1,100円

第8回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞・カネボウスペシャル 優秀賞受賞作品。2月に日本テレビ系列で放映されました。両手、両足マヒというハンディにもめげず、普通の学校生活を謳歌する18歳の定時制女子高校生の涙と笑いのダイアリー。

『やはり、その子の個性、障害の程度もあるから、全部が全部普通高校へというのはちょっと無理だと思う。でも、できることなら地域の学校で、地域の子供たちと交わるのが一番いいんじゃないかと私は思う』。(本文より)

脳卒中から生還した記者

横田 三郎著 毎日新聞社 定価 ¥980円

選抜高校野球大会の抗議電話の対応をしているうちに、猛烈な頭痛に襲われ、それがまさか脳卒中の前触れとは思わなかったと書きはじまっている。

病気発生時の対応の仕方から、現代の医学問題、病院での訓練経験、新聞記者に復帰するまでの闘病記録が書かれています。

『リハビリという苦痛を伴う猛訓練と結びつける人がまだいるが、「脳卒中のリハビリは患者に苦痛や恐怖感を与えてはかえって悪い結果になります』と院長は言葉を結んだ。(本文より)

編集後記

桜の花咲く季節となりました。今年は暖冬だったため、幾分開花が早まっているようです。忙しさにまみれて、桜の木の下を通ることがあっても、立ち止まって花見をする機会がなかなかありません。

前回より『介護』という難しいテーマを取り上げていますが、編集側の考えはないままに、色んな方々の意見を掲載しています。さまざまな考えどれもが大切な意見です。寄りよい方向を次回もさがして行きましょう。(H. A)

3月から4月にかけては『別れ・出会い』の季節です。特に友人との別れはつらいものです。このまま時間が過ぎて行かないで欲しいと思うことがあるものです。『出会いがあれば必ず別れがある』という言葉の意味をつくづくと感じさせる今年の春でした。

今後も皆さんのご意見、ご希望をお待ちしています。(Z.O)

12. 13号のテーマとは 介護とはⅢ・Ⅳ